

水曜日の「聖書を読む会」では4つの福音書を比較しています。似ているけれども少し違うところを「なぜ？」と考えると4人の福音書記者の執筆の意図が浮かんできます。今朝の聖書には、イエス様が洗礼を受けられると「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえたと書かれています。ルカによる福音書は「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると天が開け」とイエス様も民衆と一緒に受けられたことを強調しています。「も」は、イエス様が人間の罪深い現実をご自分に関係があると考えられたことを表し、それが神様のみ心に適うことだと言っているのだと思います。これがルカが自分も福音書を書こうと考えた理由だと思います。

ルカはパプテスマのヨハネのことをどの福音書よりも詳しく紹介し、「悔い改めにふさわしい実を結べ」と言われた群衆が、「私達はどうすればいいのですか」と質問すると、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物も持っている者も同じようにせよ」と言ったと書いています。ルカは、苦しみも悲しみも、後悔も希望も、自分一人で抱え込むのではなく、1人称複数形で「われわれの問題」として受けとめることへ変わることが悔い改めだと考え、ローマ市民である自分たちも支配されている人々のことを自分の問題として考えなければならぬと理解したのです。

23年前、1999年の正月に中国の南京に行きました。その年の2月6日に新潟で「南京 1937」という映画の上映会をする為に南京で何が起こったのかこの目で見てこようと思ったからです。1937年12月10日から9週間の間に、市民15000人、民間人の服を着た兵士が20000人、捕虜30000人、武器を持たずに逃げ惑う兵士90000人が殺され、20000人の女性がレイプされたと聞きました。上海で日本軍は苦戦して、10000人近く殺されて中国軍に対する憎しみが膨れ、食料の現地調達も困難で精神的に極限状態になって南京に到着したという事情があったようです。

「私は、まだ生まれていなかったし関係ありません」と言いたかったけれど、それでは中国の人にも日本の兵士達にも何の慰めにならないし、戦争という非人道的な事を二度と起こさない力にもならないと思いました。

自分が不幸である原因を相手のせいにして相手を非難している限り、和解も再発もないのです。自分の過ち、自分の罪、自分の失敗に気がついて、悔い改めようとする処にイエス様も一緒にいてくださることを忘れてはなりません。